

1.3 石版製作から出版まで

「石版工松田氏」 静山による実測図の作成作業は、モースの一時帰国中に大半がなされたと推定される。出来上がった原図は再来日したモースのチェックを受けた。モースの目指したレベルは高く、今日でも推定の難しい土器片の微妙な傾きにまで眼を光らせ、描き直しを命じている。それでも配置を別とすれば、『大森貝塚』には殆どが原図のとおり印刷されているので、静山はモースの期待に十分に応えたかと思える。しかし今度は「石版工による底部の表現は正確ではない」（モース 1983:p.88）と、モースは石版工の仕事に納得していない。画工の原図を石版へ写すいわゆる「描画石版」では、石版工の技能もまた重要である。

モースが『大森貝塚』の図版に石版を用いることにしたのは、大学に石版用の石があったからだ（『その日 2』:p.29）。明治期に欧米から移入された石版印刷は柔らかい石灰岩の表面を研磨することで砂目がたち、写真のような陰影が得られる。無論写真も存在したが当時は、「年月ヲ経ルコト久シケレバ化学変化ヲ致シ写影為ニ消滅スル」（平木 1936 : p.67）ので、代わって保存のきく写真のような石版印刷に肖像画や社寺の境内図、商店の引札など需要が多かったのである。また石版は描画面を研磨し直せば再利用が可能である。大学に石材があったのは教材の作成などに、日常的に多用されていたからだろう。

静山の原図から石版製作をしたのは『大森貝塚』序文にある「石版工松田氏」である。この松田とは当時、東京京橋区呉服町で銅石版印刷所「玄々堂」を営んでいた松田緑山（敦朝）である（Fig. 16）。緑山は 1874（明治 7）年に蝮川式胤から石版印刷機一式を入手し玄々堂を開業した（Fig. 17・神奈川県立近代美術館 1998）。緑山はまた明治 18 年の『石版技手人名鏡番付』で「年寄」に格付けされた石版・銅版画の第一人者であり、玄々堂は政府から紙幣の



Fig. 16 Portrait of Atsutomo Matsuda
(The Museum of Modern Art, Kamakura 1998)



Fig. 17 Office of Gengendo
(The Museum of Modern Art, Kamakura 1998)

印刷を請け負うほどであったから、東京大学とも身近な存在だったろう。若き平木政次も 1878 (明治 11) 年 10 月 10 日から玄々堂に画工として努めることとなった (平木 1936 : p.67)。そこで眼にした種々の成果物の中に、「大学の理科解 (ママ) 粹、大森介墟の古物図、蜷川式胤氏の陶器の図」があった (平木 1936 : pp.70 ~ 71)。また平木は後にモースに頼まれて、「大森より堀 (ママ) り出したる土器の石版摺の図へ、実物を見て着色をしたり」している (平木 1936 : p.72)。

『大森貝塚』巻頭を飾るのは、有名な貝塚発掘風景の石版画である (Fig. 18 - 1)。140 年前の調査がまるでスナップ写真のように伝わってくる名場面である。大勢の人が線路際で作業を行っており、鉄道省敷地内の 10 月 9 日の第 3 回調査を描いていることがわかる。この原画は静山の原図中にはない。名所旧跡の石版画は玄々堂の主要な業務である。発掘風景のいかにも手馴れた筆致は砂目石版の名手といわれた、やはり玄々堂の亀井至一によるものである (西野 1997 : p.350・神奈川県立近代美術館 1998 : p.85)。これほどの臨場感を実際に現地でスケッチするか、現場写真から画を起こすかであろう。

亀井は明治 12 年 8 月の上野公園での天覧流鏝馬や (2)、来日したドイツ親王の観劇風景を現地で「実写」して帰り、夜を徹して石版に描き、翌朝には印刷し玄々堂製として売り出した。巧みな遠近感と樹木や雲の描法など、ふたつはよく似ている。亀井のような当時の写真の及ばない一瞬を捉える「実写の出来る画工は、稀であった」し、仕上げまでのスピードが他の印刷所にはない玄々堂の強みだったのである (平木 1936 : pp.71 ~ 72)。佐原はピーボディ博物館で、モースの持ち帰った大森貝塚の遺物写真は発見したが期待した貝塚の写真はなかったといっている (佐原 1988 : p.256)。発掘風景は亀井が現地で実写したからであろう。

モースが評価した蜷川式胤の『観古図説—陶器之部—』の石版画を担当したのも亀井である。周到なモースは第 3 回調査時までには静山のみならず石版印刷所まで確定し、玄々堂もそれに合わせて体制を整え、亀井を現地に送り込んだのである。玄々堂に勤務していた平木は、『大森貝塚』が刊行された後に静山の後任として博物館に採用となった。静山のみならず平木の去就にもモースと大森貝塚が関与している。

ではどのように図画を原図から石版に写すのだろうか。そこで用いられるのが「コロンペーパー」と呼ばれる、今日のトレーシングペーパーのような半透明の転写紙である。明治期の石版印刷についての実用書『実用石版印刷術』には、「転写紙に二種あり。コロンペーパー (「ライス」転写紙) 画仙転写紙之なり。而してその用途も亦重に二様なるが如し。「コロンペーパー」は文字図画書き用に亦原版形取り等に画仙転写紙は彫刻銅版及石版反対形取り等に専用するが如し」とある (丸岡 1904 : p.9)。さらに「版下描き法は先づ「コロンペーパー」に脂肪物等を以て製したる石版用解墨を小皿に清水少適量を以て擦り濃淡の度は平常執筆する硯の墨水より少しく淡なる位に擦りて又之を薬指にて解墨の溶解を一層緻密ならしめ清き専用の筆亦或物は丸ペン烏口等を以て表面 (薬物を塗布しある艶のある方表面なり) に全面に於て解墨液の濃淡部等の出来ざる様明精に要用の文字又は図画を書画するなり」 (丸岡 1904 : p.9)。そして原図を書き写したコロンペーパーを石灰岩の石版に圧着し剥がせば、描画面が石版に残る。さらにアラビアゴムを塗布すると、解墨の油分とアラビアゴムの酸によって化学反応を起こし平版ができる。そこにインクを載せて印刷するのである。1896 (明治 29) 年の『石版印刷独習法』には当時の石版印刷機が紹介されており (木村 1896)、こうした機器は現代の美術石版印刷 (リトグラフ lithograph) の製作においても用いられ基本的に変化はない。

石版用解墨や「クレヨン」と呼ばれる専用の筆記具の柔らかな描画は、多色摺りよりも墨色一色に向いている。インクによる刷り上りは通常、鉛筆描きの原図よりも強く濃くなる。しかしモースが不満を持った第 2 版 10 の土器底部の網代痕に関しては逆に淡く、植物を編んだごぎ目のような



1



2

Fig. 18 Lithograph of Chiichi Kamei (1. Morse 1879b, 2. The Museum of Modern Art, Kamakura 1998)

Table 1 Timeline of developing “Omori” report

年	月 日	内 容	推定される“Omori”作業
1876 (明治9)	2月22日	木村静山、教育博物館画工に内定。	
1877 (明治10)	4月12日	東京大学創設	
	6月19日	モース来日、大森貝塚を発見。	
	24日	モース、教育博物館訪問。	
	7月12日	モース、大学と2年契約。	
	8月18日	教育博物館開館	
	9月12日	モース、教育博物館再訪。	
	15日	モース・伊藤、博物館へ関与を命じられる。	
	16日	貝塚調査 (1回目)	静山 ●
		モース、「もっと注意深い報告書をつくる」	●
		伊藤日記、16・17日「静山来訪」	●
	18or19日	貝塚調査 (2回目)	●
	20日	伊藤日記、「文部省辞令 博物館工出勤可事」。	●
	21日	貝塚についてまとめ、土器を1/2他で描く。 “Nature”「あらゆる便宜が私に与えられる」。 報告を出版し、各国へ送ると大学が約束 考古展示室をつくる。	● ● ● ●
	10月 7日	伊藤日記、「静山来訪」	●
9日	貝塚調査 (3回目) “in the first excavations”	● 玄々堂	
18日	伊藤日記、「静山トラレス様」	●	
11月 2日	モース、一時帰国の途へ。	●	
19日	松浦と佐々木、大森貝塚発掘。	●	
1878 (明治11)	3月11日	大学、東京府に発掘終了を通知。	●
	4月23日	モース、横浜着。	●
	6月 8日	モース、“the art of illustration”講演。	● ●
	7月13日	モース、横浜を出港、函館へ。	● ●
	9月17日	モース帰京。	●
	10月10日	平木政次、玄々堂入社。	●
11月22日	モース、大森貝塚と大森海岸を訪ねる。	● モース	
1879 (明治12)	1月	モース、種田、飯島、岩川、貝塚へ。 “Popular Science Monthly”発行。	● ●
	5月 7日	モース、横浜から長崎へ。	●
	23日	伊藤日記、「静山来小石川植物園画工ノ雇為届」	●
	7月12日	東大との契約を8月31日まで更新。	●
	16日	“Shell Mounds of Omori”目付。	● 日就社
	31日	佐々木、陸平貝塚発見のモース宛て手紙。	●
	8月31日	モース、東京大学任期満了。 8月末、“Shell Mounds of Omori”出版?	● ●
	9月 3日	モース、帰国の途に。	●

(磯野 1988b をもとに作成)

特徴が伝わらない。基本的に写しているものが何か、考古学の素養のない石版工には理解できないのであろう。無理のないことではあるがモースはそれを看過できない。

原図に残るモースの“Plate”のローマ数字とアラビア数字のペン字は、版とその順番を石版工へ指示したものである。つまりレイアウト段階から石版工に任されている。原図では一つ一つ独立していた遺物も、石版では一図版に多数配置せざるを得ない。ひとつの土器の各部は余白に応じて分離し、指示線で結ばれてはいるものの煩雑な状態となった。

作業工程 モースが『大森貝塚』で石版工に不満を述べたということは、すでに刷り上った図版を見ながら原稿を執筆していたことになる。これまでの経過から想定される工程を再度振り返ってみると (Table 1)、起点は第1回調査後に「もっと注意深い報告書をつくり上げる」(『その日2』:p.10)と宣言していることに始まる。そして3回目調査時には玄々堂の亀井が現地で作業風景を実写している。つまり遅くとも2回目後には石版印刷所が確定していることになる。石版は基本的に遺物図版用であるから原図作成が前提となる。1回目と2回目の間はわずか2、3日であり、こうして静山は当初から図化に関与させられていたと推定される。作業は主要な遺物の揃った3回目調査以降には本格化し、本務ではない仕事を命じられて困惑したであろう静山が頻繁に伊藤宅を訪れたことにも符合する。作図は269枚にのぼる。単純に1日1枚作成したとしてもおよそ10か月、習熟しても半年は要する量である。するとちょうど1877(明治10)年9月の貝塚調査時から、モースが一時帰国後に日本に戻る翌年4月までの期間にほぼ該当する。無論実際の作業量は一律ではなかったろうが、特に一時帰国までの期間、直接的な薫陶を受けて集中的に実施されたと考える。そこで指摘された点を再来日するまでに修正し、日本に戻ったモースの最終的なチェックを受ける。そしてモースが6月に大学で挿図についての講演を行う頃までには終了したと思われる。

次の石版製作を指示するには、モースが分析の見通しを得て図の順番を決めていなくてはならない。モースは7月13日から8月にかけて東京を離れ北海道から東北への旅行をしているので、それまでには原図にペンで図版番号を記入し、石版製作の段階に移ったと考える。再来日後わずか2か月余りであるが、後述のピーボディ博物館のメモにあるようにモースは一時帰国中に詳細な分類案を検討していたからである。

「大森介墟の古物図」を目にした平木が玄々堂に入社したのは10月である。モースは11月22日には現生貝との比較のために大森海岸に行き(『その日2』:p.222)、年明けに教え子らと再度貝塚を訪れ追加調査を行っている。この頃には執筆に入っていたのだろう。

松田の玄々堂は亀井をはじめ優秀な職人を複数抱えているし出来上がりまでの速さを誇っていたから、作業に入れば単色の遺物図など静山の原図製作ほど時間はかからなかったろう。またレイアウトは基本的に玄々堂任せだったようだから、原図を受け取って2、3ヵ月後には出来上がった石版図版が届けられたのではないか。つまり遅くとも1878(明治11)年の年内である。しかし多忙を極めたモースの原稿の脱稿日は1879(明治12)年7月16日であった。



Fig. 19 Office of Yomiuri Shimbun (Segawa 1900; National Diet Library website)

結局は大学の任期満了を目前に短期間で執筆され、『介墟編』との齟齬を生んだ「推敲もろくにしなかった」（佐原 1977：p.34）あわただしさであった。

「印刷師日就社」『大森貝塚』はようやく活版印刷と製本の最終段階に入った。活字の印刷は、「英語を一語も話すことができない植字工の手によって日本の会社でおこなわれた」（モース 1983：p.13）。この会社が序文にある「日就社」である。日就社は神奈川裁判所の通訳をしていた子安峻らによって 1870（明治 3）年に横浜で創立された、我が国活版印刷所の草分けである。子安らは明治 6 年に自らの語学力と活版印刷の設備を用いて、日本人の手による英和辞書を出版した。また同年、部数 200 部で隔日刊の新聞を発行した。「読みながら売る」という瓦版にちなんで名づけられたのが「読売新聞」である（読売新聞社 1955）。新聞は半年後には発行部数 1 万部の日刊紙となり、明治 10 年いわゆる「銀座新聞街」に社屋を移している（Fig. 19）。そこは明治 5 年の銀座大火以降整備された煉瓦造りの街に、大小の新聞社と印刷関係業者が集まった一大出版エリアであった。呉服町の玄々堂とは 1km 余の距離である。英文活字印刷の実績に加えて地理的な位置からしても、日就社が『大森貝塚』を手掛ける条件が整っていたといえる。悪筆で有名なモースの手書き文字は、助手の種田織三が清書し日就社の活字工に託され（モース 1983：p.14）、そして活字が組まれた。

『大森貝塚』は表紙と扉に「2539（1879）」とあるのみで、実際の刊行月日はわかっていない。松村瞭はそれを本来のモースの任期満了となる 1879（明治 12）年 7 月と推定している（松村 1926）。磯野直秀は当時の英字新聞である“The Japan Weekly Mail”1879 年 9 月 6 日号に『大森貝塚』の記事が出ているので、8 月末と推定している（磯野 1988：p.484）。だとすれば清書原稿が日就社に渡って植字と校正をし、印刷の後に石版折込図版とともに製本して完成するまで 1 か月余という早さである。しかしそれでも本来 7 月いっぱい自身の任期内には間に合わない。

大学は再任を望んだがモースは容れず、予定通り帰国の意思を固めていた。しかし 7 月 12 日、モースは大学との契約期間を 8 月 31 日まで延伸している。後任のホイットマンの来日が 8 月 14 日であるからそれを待ったということもあるが、8 月は暑中休暇中であり授業には事実上差し支えない。一方大学は「私が書く紀要は何にもまれ出版し、そして外国の各協会に送ることを約束してくれた」（『その日 2』：p.29）し、総理の加藤弘之も交換文献のために『大森貝塚』を持ち帰って欲しいと要望していたから（磯野 1987：p.262）、帰国時に携行しないことなどあり得ない。しかし多忙の中で執筆に励むも未だ脱稿には到らず、このままいけば 7 月中に刊行できないことは他ならぬモース自身が一番よくわかっていただろう。『大森貝塚』の完成を待ったというのが 1 か月更新の現実的な理由であろう。そして完成した本を携えて、モースは 9 月 3 日に横浜港から帰国の途に着いた。

出来上がった『大森貝塚』はモースの配布分も見込んで一体どのくらいの部数印刷されたのだろうか。アメリカのボストン美術館やスミソニアン国立自然史博物館、イギリスの大英博物館、オーストリアのウィーン民族学博物館などには出土品の石膏模型があり、こうした資料に伴って『大森貝塚』も各国博物館にもたらされた（東京大学 1878・佐原 1988：pp.256～259）。また 1881（明治 14）年 9 月、イタリアのヴェネツィア万国地理会議の際に開催された博覧会に大森貝塚の出土品が展示され、『大森貝塚』をもとにしたイタリア語のレポートも作成された（石井 1997：p.338）。モース以外に政府によっても、国際的な広報の機会に『大森貝塚』は積極的に配布されたのだろう。

『大森貝塚』の発行部数は生まれたばかりの大学の対外的な活動を数量的に知り得る点だが、『文部省出版書目』には、題名や発行年はあるものの部数はない（文部省 1884）。『大森貝塚』刊行の後『郵便報知新聞』10 月 6 日号に、東大が翻訳に着手したという記事がある（磯野 1987：pp.123～124）。表紙に「明治十二年十二月」の刊行年月が記された『介墟編』である。『大森貝塚』と『介墟編』は折込図は共通しているので、あらかじめ石版部分はかなりの数が刷られたろう。しかし今日『大

森貝塚』は市場に現れても『介墟編』を目にすることはない。大正15年2月の『人類学雑誌』でも、『介墟編』は絶版だが英文は残部があり、2円80銭で丸善で販売するとある（人類学会1926:p.93）。半世紀を経ようとしてもまだ『大森貝塚』が一般に販売されていたということは、その発行部数が大変な数であったことがうかがえる。刊行当時他に国内に大学はなく、第1号の紀要という事情があったとしても、それが邦文編ではなく海外向けの英文編であることに当時の大学や政府の高揚した精神を感じさせる。

1.4 『大森貝塚』以後

“Okadaira Shell Mound at Hitachi” こうしてモースは実質1年9か月余の短い滞在期間に、明治の日本という新開地に多くの種を蒔いて去った。それを育て花を咲かせるのは引き継いだ人々である。延べ数千人とも言われるお雇い外国人の中でもモースの存在が際立つのは、何より彼に接した次代を担う日本人に慕われ伝えられた人間的魅力にある。では本書の主題である考古資料の実測図はその後どうなったのだろうか。この点についてはすでに論じたことがあるが（田中1991・2004）、鍵となるのは教え子であり、モースの傍らにあって意思を直接引き継いだはずの佐々木忠次郎・飯島魁による茨城県陸平貝塚の報告書、“Okadaira Shell Mound at Hitachi”（Iijima and Sasaki 1883）である（以下“Okadaira”と略）。

“Okadaira”は『大森貝塚』の付録として刊行された。律儀な佐々木は飯島の名を先に冠したものの、ドイツ留学中の飯島に代わって実質的に一人で作成にあたった（美浦村教育委員会2006）。モースと静山が作り上げた実測図がどのように継承されたかされなかったか、それはなぜなのか。最後に“Okadaira”までの経過を追いつながりこれまでの筆者の見解の修正も含め、再検討してみたい。

佐原はピーボディ博物館において、モースに宛てた佐々木の書簡を発見した（佐原1988a・美浦村教育委員会2006）。主なものは4通、まず最初は佐々木と飯島が暑中休暇中に淡水貝採集のために霞ヶ浦沿岸を訪れて陸平貝塚等を発見する。帰国直前で多忙な東京のモースのもとに、現地からの1879（明治12）年7月31日付けの第1信である。続けて8月4日付けで、近日中に発掘に入るといふ第2信が来る。その後発掘を行い調査成果を伝える第3信は、すでに帰国したモース宛に10月6日付けとなっている。そして最後に12月1日付け第4信が、アメリカのモースに届く。ここに佐々木自筆の多くの出土遺物が図示されている。これを起点に、速報を掲載した1880（明治13）年2月13日発刊の大学学術雑誌『学芸志林』“Gakugei Shirin”第6巻第31冊（佐々木・飯島1880）と、1883年（明治16）年刊行の“Okadaira”の図を順に見ていこう。なお“Okadaira”の発行年は表紙には「2543（1883）」とあるのに、扉では「2542（1882）」となっている（斎藤1983）。本来は1年前に刊行予定だったのだろう。

第4信には完形土器と口縁部破片に網代痕のある底部、骨器や石器にいたる出土遺物をひとつおとり図示している。筆致は鉛筆描きのようなかすれた濃淡である。完形土器などはスケッチであるが、口縁部破片は陰影も加えて写真のように実態を伝えようとしている（Fig. 20-1）。紙上に平置きできる破片類は当然水平目線の図となるが、直立する完形土器類は水平と斜め上からの両方がある。注目すべきはスケッチながら図の隅に1/2や1/4といった縮尺や、“red”などの色調をはじめその特徴がメモ書きされている。原図に残るモースのメモを忠実に踏襲している。

『学芸志林』では第4信からさらに遺物を選択している（2）。銅版画のような線描であるが筆致からやはり佐々木によるものだろう。第4信と同じく基本的にスケッチで、実測図ではない。異なる点は縮尺が明記されていないことと、図が斜め上からの視点で描かれる傾向が強くなっていることだ。破片は水平目線であっても破断面が見え、完形土器は反対側の口縁内部がのぞける。この視